

2020  
秀作

## 第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

# 笑顔を守りたい

愛知県・愛知県立半田商業高等学校 3年 大堀 ありさ

私には、フィリピンに親戚が沢山<sup>たくさん</sup>居ます。日本にも居ますが、両手で足りる程度しか日本には居らず、大半はフィリピンに居るのです。なぜかと言うと、私の母はフィリピンの生まれで、八人兄妹の末っ子として生まれたからです。私の母、上から三番目の母の姉は日本在住ですが、他の兄妹は何人か日本に来たことはあるものの、ずっとフィリピンに住んでおり、交通量が多いにも関わらず、あまり整備されていない道路が目の前にある、少し大きめな平屋<sup>いわゆる</sup>「おばあちゃんの家」でそれぞれの家族と一緒に住んでいます。そのおかげもあり、私が最後にフィリピンを訪れた小学5年生の当時は、約40人もの大世帯で、年齢層の広い従<sup>いとこ</sup>兄妹に、六人の叔父叔母とその奥さんに旦那さん、そしてその大世帯のまとめ役とも言えるおばあちゃんが居ました。当時でさえ、皆の名前を覚えきれず、混乱することが多かったのですが、最後に訪れたその時から約6年、従兄妹は更に増え続けており、もう私には名前も分からない、顔さえ合わせたことの無い子たちが沢山居ます。当然、皆で住んでいた平屋に入りきる人数ではなくなり、今では、家族が出来た従兄妹は別の所へ移り住んだり、平屋からは少し遠いものの道路も整備されており、それなりに周りも栄えている、私の母が購入した二階建ての一軒家に、おばあちゃんや従兄妹の何人かで、私たちがフィリピンに居ない間の管理も兼ねて、そこに住んでいます。

そんな数の多い親戚たちですが、いつも皆優しく接してくれて、笑顔の絶えない、親切な人ばかりでした。日本から来た私に、沢山話しかけてくれて、私はフィリピンの母国語であるタガログ語を全て話せたり、理解できる訳では無かったので、「言葉の壁」というものを感じることも多々ありましたが、皆は私が分かりやすいようにと、英語での会話に努めてくれたり、私も皆の言葉を理解しようと母に言葉を教えてもらうことで、コミュニケーションにも大きく困ることはありませんでした。しかし、言葉が分かれば分かるほど、沢山いるフィ

リピンの親戚の現状を知っていくことになりました。

私が、母から 100 ペソ（日本円に換算すると約 250 円）のお小遣いをもらい、少し歩いた先にある小さな出店で約 30 ペソで買える、「フィッシュボール」という白身魚のすり身を丸めて揚げた食べ物を買って行った帰りのことでした。それを買って帰ると、私より年下の従兄妹二人が目を輝かせて寄ってきて、「どうしたの？」と聞いてみると、「私たちにもそれ頂戴！」と明るい声で言いました。すぐ近くの出店で売っているし、と思い「まだ売っているから買いに行ったらどう？」と慣れないタガログ語で伝えると、二人は眉毛を下げ、少し悲しそうに「お金が無いの」と言いました。私はその時の二人の顔を今でも忘れられません。確かに、私の親戚たちは決して「裕福」であるとは言えず、寧ろ「貧乏」だと言えます。食費・光熱費は、おばあちゃんの家に住んでいる家族での折半でしたが、それでも支払うのが精一杯であることが多くありました。私自身、現地の言葉がニュアンス的に一部理解出来るようになってから、私の従兄妹の誰かが必ず母に「お金を頂戴」と頼みに来るのが分かり、その中には「学費の支払いをお金が無くて出来ない」という理由で貰<sup>もら</sup>いに来る私と同年の従兄妹も居るほどでした。その従兄妹は学業に対し、きっと私よりも特に熱心な子です。6年経った今でも、時折私の母に学費のことについて連絡してきます。フィリピンは日本と違い、高校までは義務教育ではあるものの、制服、文房具、学校まで行くための交通費などが無く、学校へ行くことを断念している子も少なくはありません<sup>1)</sup>。

フィリピンでは、現在でも貧困が問題となっており、貧富の差が日本と比べても一目瞭然と言えるレベルです。フィリピンは、高層ビルが多く建っている都市であるマニラや中心街、旅行先にぴったりなセブ島などを見ると裕福に見えるのかもしれませんが、しかし、経済成長は近年、日本の5倍以上で成長しているにも関わらず、貧困層は約3割程度、昔と比べたらかなり割合は低くなったそうですが、貧困層の貧困問題が更に悪化したという話もあります。日本から見れば、リゾート地のイメージが大きいセブ島は実際、貧困地区が多く広がっています。なぜ、フィリピンは貧困に陥っているのか。それは、富裕層と貧困層の大きな所得格差、国内に仕事が無い故に低い就職率、貧困の家庭で生まれた子は、教育を受けることが出来ない等、様々な問題があります。

私は、様々な問題がある中で、フィリピンの「出生率」に着目しました。フィリピンの出生率は日本と比べても段違いに高く、日本の平均年齢が46歳、人口ピラミッドはつぼ型で、少子高齢化が問題視されていますが、それに対しフィリピンは、平均年齢が24歳、人口ピラミッドは綺麗な富士山型きれいなとなっており<sup>2)</sup>、逆に子供の方が割合は多いのです。フィリピンは人口の約90%がカトリックで、それも厳しく、離婚や避妊、人工中絶が禁止されています<sup>3)</sup>。今ではかなり緩和されているそうですが、私の母も人工中絶はいけないと言うほどです。つまり、まだまだその慣習は根強いのだと思われます。そういった点から、子供は増え続け、特に、貧困層で生まれた子たちは家庭の経済的余裕が無いことから、学校に通うことも出来ず、教育を受けられません。そして知識も学歴も無いまま故に、定職に就けず、貧困から抜け出すことが出来ないのです。フィリピンは日本のように職が多くある国ではありません。先程も述べたように、就職率は国内の仕事が無いことから低く、アルバイトや非正規雇用の仕事でさえ、就くにはかなり難しい世界です。だから、日本や国外へ出稼ぎに出ている人もいます。

今、私の叔父の一人も、国外へと家庭のために出稼ぎに出ている人がおり、その人は「ミクロネシア」という小さな国へ出稼ぎに出ています。しかし、そこで稼げるお金も大きな金額ではなく、仕事に見合った給料を貰うことは実際出来ていません。フィリピンにも当分は戻ることが出来ず、その叔父の息がおばあちゃんに「お金があったら良かったのに」と夜な夜な泣いて話しに来た、と母から聞きました。あんなに笑顔の絶えない従兄妹が貧困によって笑顔を失っている。私は家族なのに国が違うだけで、こんなにも苦しんでいるという現状がとても悔しくなりました。

例えば、フィリピンの国内の仕事が増え、就職率が高くなれば、貧困問題も徐々に解消されていく。そして、出生率が高くても、経済的に余裕のある家庭が増え、子供たちは教育を受けることができ、それは未来の労働人口の増加、フィリピンの経済発展につながり、きっと発展途上国から抜け出すきっかけになると私は思うのです。しかし、私はまだ高校生であり、そういった問題の解決には大きな力にはなれません。出来ても、まだ少しの、ほんの小さなことしか出来ません。しかし、その小さなことで、せめてフィリピンで苦勞している家族たちを少しでも助けたい。私がやれることと言うと、使わなくなった文房具、もう

着なくなった服等、それを従兄妹たちの元へ送ることくらいしか今は出来ません。しかし、それが従兄妹たちの手元に届くと必ず、「ありがとう！」とメールが届いたり、服を着て笑っている写真が送られてきたり、私は少しでも力になっているのだと実感します。私よりも苦しい生活をしていても、笑顔を普段から絶やさずに暮らしている従兄妹、親戚たち、私はその笑顔を絶やしたくはありません。私は、笑顔を守るために、出来ることを少しずつでも増やし、それを一つずつ行っていきたいです。

(注)

- 1) 3) セブターン「フィリピンの貧困って実際どういう状況なの？ボランティアで感じたこと」

URL <https://intern-college.com/blog/poverty-philippines/#i-3>

閲覧日 2020年9月2日

- 2) グローリアセブ「フィリピンの平均年齢は24歳。寿命は日本より20歳も若い」

URL <https://gloleacebu.com/averageage/>

閲覧日 2020年9月2日

